



## 21世紀の大阪湾（そのⅢ）

榎 木 亨\*

筆者はすでに21世紀の大阪湾という題目で、現在計画されている大阪湾でのプロジェクトを「そのⅠ」「そのⅡ」とわけて紹介してきた。それらは新関西国際空港、明石海峡大橋、紀淡海底トンネルであって、いずれも1兆円にも及ぶ大プロジェクトである。しかし大阪湾にはこのような大プロジェクト以外にも、規模は若干小さいけれどもいくつかのプロジェクトが計画準備されている。

ここではこれらの計画を述べて、変貌する大阪湾の姿を紹介しておきたい。

### フェニックス計画

フェニックス計画とは通称であって、広域処理場整備計画が正式名称である。この事業の実施には昭和57年に設立された「大阪湾広域臨海環境整備センター」が当たっている。この計画は大阪湾圏の辺域において生じた廃棄物をもって海面を埋立て、港湾用地としての土地の造成を行おうとするもので、センターの出資団体は近畿2府4県及び159市町村からなっている。

一般に廃棄物は、人の日常生活から出てくるいわゆる「ごみ」と、各種の事業活動によって工場、事業所から発生する廃棄物によって分けられている。前者は一般廃棄物と呼ばれ、その処理は原則として市町村が処理責任を負っており、後者は産業廃棄物（産廃）と呼ばれ、排出事業者がその処理責任を有するわけであるが、この排出事業者から依頼された廃棄業者が無許可で他人の土地あるいは河川敷に廃棄して、新聞で問題になっている場合も多い。このように高度な土地利用が行われている近畿圏では、陸上に廃棄物の処分地を見出すことが難しいため、海上に大きな囲いを作り、その中にこれら

の一般廃棄物、産業廃棄物を投棄し、同時にそれらによって新しい土地を造成しようとするものであって、府県の区域をこえた、東京都の夢の島造成と考えるとすれば理解され易いであろう。では近畿圏ではどれ程の量の廃棄物が生じるのであろうか？ センターの推定では昭和60年度で、一般廃棄物は900万t/年、産廃で4790万t/年、昭和75年度では一般廃棄物は1350万t/年、産廃は7610万t/年も発生するといわれている。このうち一部は再資源化等がはかられるとしても、膨大な量の廃棄物を処理していく必要があり、センターでは一次計画として尼崎沖に113ha、泉大津地区で200haの処分地を公表し、目下関係諸官庁と調整中である。この処分地は護岸のみ建設された後、廃棄物に対して料金を徴収して埋立てを行い、その埋立地を売却して事業の収支を図ろうとするものである。

### 南大阪湾岸整備事業

この整備事業は泉州沖に建設される予定の新関西国際空港と連動して行われようとする事業計画で、一般には前島計画、あるいは沖出し計画といわれているものである。その目的は空港の建設の支援、空港アクセスの整備の円滑化、空港完成後の空港機能の支援施設の用地確保等があげられている。当初陸上部より約1km離れた所に北島、南島の2島を建設する予定であったが、その後陸上部より約1km沖に突出した沖出し方式に変わった。その沖出し案の位置及び形状は図-1に示す通りであり、第1期計画として実線部350haを目標とし、昭和61年度に着工し、空港と同様61年度完成を目指している。この第1期工事には埋立て土砂が3200万 $m^3$ 必要であり、事業費は約1000億円が見込まれている。なお点線部で示されている第2期工事まで

\*榎木 亨 (Toru SAWARAGI), 大阪大学工学部, 土木工学科, 教授, 工博, 海岸・港湾工学

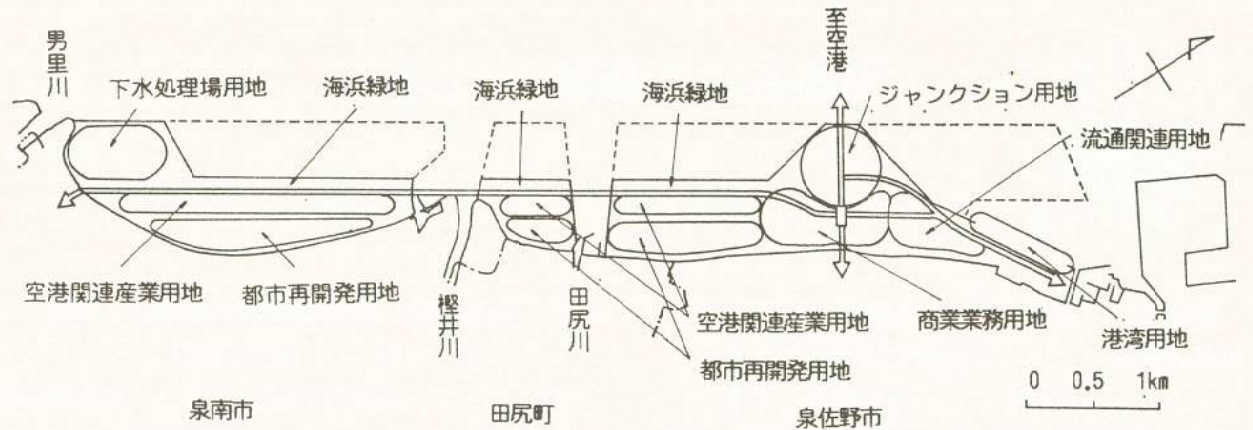


図1 南大阪湾岸整備事業計画

含めると、全埋立面積は 60ha、埋立て土量は 6900万 $m^3$ 、事業費 1750億円といわれている。これらの埋立地は図に示すように空港アクセスのジャンクション用地の他、空港活動を支援する空港関連産業用地、商業業務用地、都市再開発用地などに用いられるが、周辺には海浜緑地を配した魅力ある海岸線の創造を目指している。しかしまだ詳細な検討は行われていないようである。

### テクノポート計画

フェニックス、湾岸整備計画とともに、秒読み段階の計画とすると、これから紹介するテクノポート計画、アジアポート計画はまさに21世紀に向けての計画といえよう。しかし、いずれの計画もその一部は既に完成した埋立用地を計画の中にくみ入れるので、そういった面では既に着工されているともいえる。

テクノポート計画は大阪市が建設した大阪南港埋立地 (937ha) 及び現在工事中の北港埋立地 (615ha) を利用して、高度技術の開発や情報通信機能の集積した拠点を建設しようとした大阪市によって樹てられた計画である。既に完成した大阪南港の埋立地は、よく知られている神戸のポートアイランドの面積443haの倍以上にも達する埋立地であって、そこにはポートアイランドと同様、あるいはそれ以上のコンテナ埠頭施設、南港ポートタウンで知られる住宅用地があることは大阪の人々にも不案内である。テクノポート計画はまず、この完成された南港

埋立地の一部からはじまり、北港埋立地の活用へと発展していくものである。その基本的な考え方は21世紀に向けた新たな都市機能の充実と、従来の都市機能の再編であって、それらはつぎの三つのゾーンに大別されている。すなわち、エレクトロニクス・バイオテクノロジー等によって代表される先端技術の拠点及び人材教育機関の集積等が行われる先端技術開発ゾーン、港湾で代表される国際物流拠点や国際見本市、貿易取引センターで代表される国際取引拠点で構成される国際取引ゾーン、情報処理サービス、国内外通信ネットワークの拠点を目的とした情報・通信ゾーンであって、これらが完成されると、21世紀の大阪像は大きく変わるかも知れない。

### 兵庫アジアポート計画

この計画は昭和54年ブラジルで開かれた日伯閣僚会議においてとり上げられた議題から端を発するもので、ブラジルの様々な資源、産物をアジア太平洋地域に供給・輸送する拠点として、わが国にその拠点港を設置しようとするものである。この計画にのっとり兵庫県が淡路島の津名地区 (そのI、図-1参照) に建設しようとしている計画である。

この計画は、未だ現在では津名の佐野地区に160ha、生穂地区に150haの埋立を行い、港湾機能以外にアセアン交流大学、備蓄配分ゾーン、流通加工ゾーン、コンベンションゾーンと呼ばれる基本構想しか明らかにされていないが、20

年後の21世紀には日本とブラジルの社会経済状況に応じた資源備蓄配分基地を完成し、世界に開かれたアジアの港として国際交流の一大拠点を形成しようと計画されている。

以上のように大阪ベイ・エリアは極めて多様性のある計画で一杯であり、その実現時期も直

ぐ取りかかれるものもあれば、10年20年後の夢もあり、極めて楽しい領域といわざるを得ない。これで3回に及ぶ21世紀の大阪湾の筆を置くこととするが、ここで取上げたプロジェクトが10年後にどのようなになっているか、また機会があれば跡を追ってみたいものである。

